

なものであり、単に分別の世界では把握し得ない絶待である。しかしこのような真如を、ことさらに分別の世界で説いて、こゝに三大を示すのである。したがって体とは真如の物柄ということであり、それは実体ではない。

真如そのものは、本来平等、不増不減であり、この平等不増減のところが大きいといわれる。しかしこの体大のままに真如は無量の性功德を具していることを相大という。

もちろん、この相大としての無量の性功德とは迷の染より反顕していわれるのであり、その無量の功德を具したままで平等不増不減の体大であることはいうまでもない。

しかもそれは衆生を開覺せしめる力であり、衆生を生死界より涅槃界へと運搬してゆく力なのである。この点を用大といつたのである。したがってこの真如こそ我々を成仏せしめる力であるから、この点で「乗」とは已乗当乗といわれ、体相を全うした真如の用によつて涅槃を証得し得ることを示したものである。したがってここで「起信」とはこの真如の体相用の三大の義を信ずることを意味している。

以上のことから起信論における真如の意義が如何に重要であるか知り得ると共に、大乘仏教の通申論といわれる地位を占めていることが決して不当でない。いなまさしく大乘形而上学の根本を形成するものがこの「真如」思想であるといわなければならない。

青少年育成の為に我々仏教徒に

課せられたる使命と責任、如何を思う

山 内 健

仏教教育は仏教的訓育と仏教教育者の生活態度等を考察しなければならないが、その根本精神は如何なる人に對しても仏教的訓育を施し、陶冶の実を挙げて各自が人格完成の爲の根本動力として、仏教的信念を人々の精神に刻み込み、常に敬虔心を抱いて絶えず自分の生命の淨化に留意する人間を養成して、あわよくば信仰を生活に入らしめんとするに他ならないと思うのである。

而してその教育は、学校、家庭、社会、等如何なる場

所で行われるにしても、仏教の宣伝所としてではなく、精神的偉人の知情意、円満にして人格向上の爲の一活動として絶えず力を注いで行くべき教育でなくてはならない。この目的に対しては仏教的訓育の他に仏教への正しい理解を与える必要があるから、当然愚なる迷信邪教を避けしめることも勢い必要となつて来る。

仏教的訓育を施し陶冶を計り得る爲には、青年期以前にすでに幼児期の頃より怠らず教導し善致しうることに必要であつて、ことに回心（コンバージョン）年令を中心とした時代でも私達が中心となり、家庭、社会が一致協力して行うべき使命を痛感するのであり、この頃までに授けられた教化が一生不拔に人々の脳の中に生きるものであると思う次である。

社会及び家庭に於ける仏教教育のあり方も(1)新聞・雑誌・書籍等によるものと、(2)寺院教化者の活躍及び寺院の利用による講話・講習会・日曜学校等の外一定した方法でもつて行われているのが現状であるが、青少年に対する教化は、私の今回の「宗教調査」の総計が示す如く

全く無訓練であると断言するも過言ではない。

家庭に於ける仏教教育を今日如何なる形態で実行せしむるかは甚だ困難であり、まさに強制することも出来ない。

就いては各家庭に於ても、仏教的訓育及び知識の教授等を成し得る人が何程存在するかも甚だ心許ないのであり、従つて寺院環境を通じての教育も重要視すべきであり、農村では漸次完備しつつある文化施設の利用による視聴覚教化の向上発展も計るべき必要性があるのでなからうか。

善男善女の青少年を育成するその基盤は、幼少期に於ける情操教育であり、家庭教育、環境教育の根本も寺院利用による幼児保育として、都市農村を問わず教化に専念しなくてはならない。

現代の非行青少年の問題もかゝる基盤の教育に携わることの出来なかつた人達により占められていると推察するならば、学校、社会、住職等の職務にある人々の暖い愛情の手をさしのべる機会を多く持つことが、彼らを救

う先決問題であり、更には社会制度の徹底も重要視しなければならぬのであるが、青少年の非行内容が年々悪質犯罪の増加を帯びた昨今、その思いを家庭に運らすならば、教育の主体は母親であり、更には檀那寺である教育の主体は住職にありとみるべきであるが、いずれの場合の教育立場にある人でもその最上の本質価値を追求し、就いては精神生活を営むべく常に念仏生活の姿が必要とされなければならない。

そこには物の中心、要点を見誤らない生活が生ずるものであると思うのであり、こゝに教育の基礎としての仏教教育が、比較的成熟者、即ち教育者の宗教的行動として特に日常的行動である礼拝行動を重要視されるものがあり、被教育者の人格完成についての希望と勇気を与えることなくしては、私達の使命と責任を果し得たことにはならないのである。

換言すれば、人格の实在とその尊さを教えるものが仏教教育であり、云わゆる一般の教育は人格を自覚として知性と能力とを啓発して人間の形成を目ざして行われる

ものであり、従つて一般の教育のなし得ていない教育をするべき性質のものになる。

仏教には、元來実践面と理論面とがある。前者は個人の宗教的人格を形成陶冶することであり、後者はその形成されたものを外にはきだすこと、つまり宗教活動によつて他を教化することである。

釈尊のお説きになつた八万四千の法門の根本精神は四諦、八正道、即ち釈尊の発見せられた真理であり、これを履修することが修道の過程を意図するものであるが、人間生活の上に於ては理論のみでゆくものではなく、物質面だけで生きてゆけるものではないと思う。

ゆとりのある人、即ち心の潤いというものにして、それは私達の日常生活の上に大切な要素となつて社会のなごやかさを形成するものであり、「明るく」「正しく」「仲よく」暮らしてゆける為には、この仏法僧の三宝の恩を知らしめるべく、就いては、幸福の道、和なる社会生活に導く為に、仏教教育を精神界開拓の才一線として児童及び青少年の教化教導として進めなければならない

のであり、私達に与えられた一番大切な任務であると思うのである。

インターネット公開許諾のない文章には
墨消し処理を施しています。